

わたぼうし新聞 第10号

発行者 わたぼうし連絡会
発行日 1988年(昭和63年)1月1日

第10号の特集 「介護とは I」

処生のおきて

気持ちよい生活を作ろうと思ったら
済んだことをくよくよせぬこと
滅多なことに腹を立てぬこと
いつも現在を楽しむこと
とりわけ 人を憎まぬこと
未来を神にまかせること
ーゲーテ詩集よりー

この新聞は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考え等を出し合い、主義、主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

特集《介護とはI》

このコーナーは色々なテーマについて、さまざまな人たちに意見を述べてもらうコーナーです。

10号より障害者にとって大切な問題、『介護（介助）』について考えていきたいと思えます。福祉が整備されるに伴って介護に対する考え方も、だんだんと変化してきました。

10, 11, 12号に引き続き特集で考えて行きたいと思えます。なおアンケートを採りましたので、随時掲載していきたいと思えます。

まず、「青山彩光苑」作業療法士に『身体障害者介護についての私見』を述べていただきました。

(事務局より)

『身体障害者介護についての私見』 「青山彩光苑」作業療法士

介護・介助とは、福祉用語辞典で『ある一つの身体機能の低下、衰退、喪失の場合に起こる生活上の困難に対して、身体的機能を高め補完する日常生活の世話を中心としたサービス活動をいう』とされている。それはリハビリテーションの立場では、能力障害に対してのサービス活動を意味していると考えられる。

そこで、リハビリテーションの立場から能力障害に関する変遷を見てみると、1945年にDeaerとBrownは医学的リハビリテーションの基本的な目標として①手の可能な限りの使用、②移動能力の確保、③身の自立、④コミュニケーション、⑤より正常に近い外観、の5つの項目を示した。このような考え方はRuskやLawtonより発展され、日常生活動作（ADL）という概念が生まれるに至った。そして、このADLという概念が、リハビリテーション医学の基盤となった。即ちリハビリテーションの基本的な目標が、障害者や患者に対してのADLの自立を促すことであるとされてきた。

そして、リハビリテーションの立場ではいかにADLに対する介助量をなくすか、また若しくは軽減するかということが要求され、介護・介助を特に必要とする重度身体障害者（児）、寝たきり老人、病人などを対象とした出版物も多い。しかし、人生の質を高めるという出版物は少ない。それらは介助を身体的な観点を中心に捉えられ、How Toものとしては介護の手引き書としては充分である。しかし、よりよく生きることや、人生の質を高めることを考えると充分とは言えない。

近年、リハビリテーションの目標がADLからQOL（生活の質、人生の質）を追求するという目標の転換が行われてきている。それらは人間の本質的に生きる意味や価値を無視せず、自己実現、創造的人間として扱おうとする考え方が必要となる。それは人間学的心理学に代表される。A. F. Maslowは人間の欲求が①生理・生存、②安全・保障③社会帰属、④自我・尊厳、⑤自己成長・自己実現の五段階からなり、生活水準が高まるに連れて要求の重点が質の低いものから高いものへと順次移行するという考え方である。

さて、介護そのものの意味は能力障害に対してのサービス活動でかつ身体的な援助である。従って、人間学的心理学の観点から見ても生理・生存など生命維持に関する次元のレ

ベルでより多くの介護を必要としている。それは退行現象に対する援助であるとも思われる。そこでより高次元の介護の考え方が必要となると思われる。

ここで、『障害者役割』について考えてみる。ここでの障害者とは『長期間にわたる身体的、知的機能障害のため、日常生活上での役割行動の遂行が不可能になること』を指す。カットナーは障害者役割を次のようにいっている。①自己の社会的不利に対して忍耐強く打ち勝ちこと。②能力低下に適応すること。③障害されていない身体機能を用いて、能力低下の代償を行うこと。④ある程度まで仕事を行い、社会的には活動性を高めること。障害者役割と病者役割の相違を表示す。障害者の多くはこうした役割の二重の中にある。どちらの役割をとるべきなのか、両者とも必要に応じて他者に依存する。しかし、障害者は現状を受け入れて、その範囲内では広く社会に対して義務と責任を負うのである。即ち、介護そのものは病者役割の要素を多く含み、また障害者が能力低下に対する責任回避をすることにより生じるおそれがある。

したがって、障害者は障害者役割を再度認識し、現状を受け入れて、その範囲では広く社会に対して義務と責任を負う必要があるのである。障害者は身体的介護を受けるのは可能な限り必要最小限にし、より良く生きるために必要な創造的生活や自己成長、自己実現を達成するものに視点を向けることが大切であると考ええる。

つまり、能力障害やADLに対する介護からの価値観の変換であり、それに変わる目標即ち人生の質を高めることが必要となる。

したがって、介護に関する考え方としては介護される側もする側も能力障害やADLに対する援助のみならずより人生の質を高めるものを追求しなければならないと考える。

病者と障害者の役割

| | 病者役割 | 障害者役割 |
|-----------------|------------|-----------------------------|
| 役割の期間 | 一時的 | 永続的 |
| 社会的義務 | 免除 | 可能な限り負う |
| 医療に対する態度 | 受動的 | 能動的 |
| 自己の疾病乃至障害に対する態度 | 異化 (排除) | 同化 (適応) |
| 自己の身体的条件に対する責任 | なし | 機能障害についてはないが 能力低下についてはある |
| 社会制度上の保障 | ある | 部分的にはある |

(中村による)

私にとって介護とは 障害者支援施設・利用者

私はCPの2級です。ほとんど介護はしてもらっていませんが、体全体が不自由で特に手が不自由です。買い物に行った時等、財布からお金を出してもらっています。私は介護をしてもらったときに、心から「ありがとう」と言います。

私は2年前から昨年まで「青山彩光苑」にお世話になっていました。入った当時、車いすの人を押したり、また、体の重い人の介護をしていました。

私は出来るだけ、介護をしてもらわないようにしています。あまり人に頼ると自分のためになりません。これは、非常に難しい問題だと思います。というのは、人の親切を素直に受け取る心も大切だと思うからです。

人によると自分で出来ることも、他人に頼る人がいます。それが当たり前だと思っている。私はそんな人が嫌いです。介護をしてもらう人よりも、介護を出来る人は、とても幸福ですね。

施設看護師の立場から 障害者支援施設・看護師

普通一般、看護師は病院で医師の指示に従って患者のお世話をするという考えである。ところが、施設では身体的障害を受けたものは精神的、心理的、経済的にも病的状態になる。

障害者は一生涯障害を管理しながらの生活を強いられる。自分自身で健康管理を出来るよう身につける指導をしなければならない。看護師は優しく見守り勇気づけ励ます看護にし、すべてに手を貸すような方法は決して良くないと思う。障害者自身、介助・介護を受けることは当たり前という考えは変えなければならない。そして介護者は障害者の持つ基本的要求、最小限のセルフケアの自立にどれほど個人性を見いだして、可能性を引き出してやれるか、正しい自立が見られれば自然に家族とのコミュニケーションがとれるようになり、地域社会へと拡大されていく。いかに人間社会でのセルフケア、自立が大切であるか理解できる。これからの介護とはこのような仕事ではないかと思っている今日この頃です。

介護の窓口が必要 地域住民・主婦

第9号を読んで、Hさんをお訪ねしました。昨年7月5日にカトリック教会の青年部の方々が車いすの方々を金沢の町の好きなところを案内するとのことで、久しぶりに南陽園の皆さんとお会いし、Hさんともあったのですが、9号を読んだのでまた訪ねたのです。その時、介助のボランティアの方々が出番を待っているとの話を聞きました。登録をしていますが障害者の方々から、なかなか声がかからないということでした。せっかく介助をした

い、お役に立ちたいと思いの方々がいらっしゃるのにと思いました。介助の需要と供給がうまく処理できないものか、窓口がうまく処理できないものか、窓口がいくつあるのか、その辺が詳しくわかりませんが、何とかお互いのために生かせたらなあーと言うことでした。

(アンケートより)

ふれあいから学んだこと 地域住民・Kさん

私が身障者の方と始めて知り合ったのはEちゃん！！

高血圧の母親と二人暮らし、始めから壁なく付き合ったといえは嘘になる。付き合い合っているうちに壁がなくなり、家族ぐるみで訪問したり、受けたりです。

母親は私がいなくなれば、E子が一人でしなければならぬからと言って、何事もすべて彼女任せにしておられる。

私の家では彼女に食器選びを一任しました。口の広いものは横からこぼれてのみにくい、お皿はいちいち取るのは大変なので大皿一枚、割り箸は割るのに苦労するので避ける等々。

彼女の家を訪問した折り、パセリの鉢植えを見て「私も植えたいけれど土がなくて」、と言ったところ、三日後に「コンニチア」と彼女の声、車いすに土を入れたポリ袋を下げて、感謝感激すると共に申し訳なくて、背筋に汗が流れました。不自由な体で一生懸命に探して持ってきた苦労は少しも見せず彼女の顔は意気揚々と光り輝いているのです。

先日盲人の外出訓練がありました。私のペアはKさん。堅くならず気楽に気楽にと、会った途端にこちらの気持ちがわかるようである。Kさんは探求心旺盛で道を覚えたので行く方向を指示するのみでよいとのこと。私は後ろからはらはらしながら付いて行く。

コースは石川県視覚障害者会館から中村記念会館前を通り、本多の森公園、歴史博物館、厚生年金会館、石川門、堀内、中央公園を経てスタートの会館へ帰るのである。当初は風景を説明し、触れるものには手を触れて楽しそうであったが、人通りに出ると大変で、終わる頃には疲れ切った様子。中央公園を出たら一人で通える道、覚える必要がないのでホッとされ、後はすべてをお任せと言ったように私の肘に手をかけて障害者会館に戻った。私は外出訓練で多くのことを学んだ。

盲人の独歩の苦労は知っていると思っていたが、それは手を引いている場合のことで一人歩きが、いかに難儀で大変なことかを痛感させられたのです。以後機会を捉え歩道の整備の必要性を訴えています。人間はそれぞれ個性を持っています。個性の異なる物達が付き合い合っていくのだから対人関係は難しい。障害者であってもなくても、それは関係のない問題。立場によって物の見方、考え方が違うのであり、結果的には多くの人たちと交わることが、視野の広い人間として成長するのだと思います。

障害者の方も手助けを必要とするときは遠慮なく気軽に意思表示する勇気を持つこと。それがより多くの人と交わる機会を作り、私が外出訓練で学んだように、多くの人に立場を理解させる早道であり、ひいては、これが快適な社会作りへの一環となるのではないかと考えています。

Kさんの活動内容紹介

ボランティアサークル「ことじ会」の代表者主な活動内容は聖霊病院での入院患者さんのための図書室の運営と衛生材料作り、点字図書館での活動児童施設での子供たちとの交流。盲人のため私のカナタイプ教室の指導など。一昨年14周年を迎え、記念誌「ことじ会の足跡」発行。

「介護・介助」アンケート結果報告 その1

昨年8月に実施いたしました『介護・介助についてのアンケート』は障害者41名、健常者47名、合計88名の方々に回答をいただきました。ここに改めて皆様に厚くお礼申し上げます。

今回は第一回目の集計結果報告として、障害者の方々からいただいたアンケート結果の報告をします。

1. 年代・性別集計

| 年 代 | 男 | 女 | 合計 |
|------|----|----|----|
| 20 代 | 5 | 3 | 8 |
| 30 代 | 15 | 10 | 25 |
| 40 代 | 4 | 2 | 6 |
| 50 代 | 2 | 0 | 2 |
| 合 計 | 26 | 15 | 41 |

2. 障害別集計

| 障 害 名 | 男 | 女 | 合計 |
|----------------------|----|----|----|
| 脳性小児麻痺 | 11 | 9 | 20 |
| 脊髄損傷 | 6 | 1 | 7 |
| 脳血管障害 | 3 | 0 | 3 |
| 筋ジストロフィー | 1 | 1 | 2 |
| ポリオ (脊髄性小児麻痺) | 3 | 1 | 4 |
| 頭部外傷 (交通事故による後遺症) | 1 | 0 | 1 |
| そ の 他 | 2 | 2 | 4 |
| 合 計 | 27 | 14 | 41 |

3. 障害等級別

| | | | |
|-----|----|-----|----|
| 1 級 | 22 | 4 級 | 4 |
| 2 級 | 16 | その他 | 1 |
| 3 級 | 1 | 合 計 | 41 |

4. 住まいの状況

| | | | |
|------|----|------|----|
| 療護施設 | 1 | 更生援護 | 12 |
| 授産施設 | 6 | 福祉工場 | 1 |
| 自 宅 | 13 | その他 | 8 |

5. 『ADL (日常生活動作)』において、 どんな介護が必要ですか。

| | | | |
|-----|----|-----|----|
| 移 動 | 8 | トイレ | 3 |
| 入 浴 | 15 | 外 出 | 25 |
| その他 | 4 | 無回答 | 10 |

(重複回答あり)

※その他の中に、筋ジストロフィーの人に寝返り、ポリオの人に立ち上がりという意見がありました。

6. 介護されてどんなことが困りますか。

| | |
|----------------|----|
| 自分で出来ることまでされる。 | 10 |
| 口うるさい。 | 4 |
| 言葉が通じない。 | 2 |
| 意志が通じない。 | 4 |
| そ の 他 | 5 |
| 無 回 答 | 17 |

(重複回答あり)

7. 誰に一番介護してもらいますか。

| | |
|---------|----|
| 家 族 | 14 |
| 施 設 職 員 | 16 |
| 友 人 | 7 |
| ボランティア | 2 |
| 無 回 答 | 13 |

(重複回答あり)

8. 貴方は介護者がいなかったら生活が出来ますか。

| | |
|------|----|
| 出来ない | 15 |
| 無回答 | 13 |
| 合計 | 41 |

9. 介護をされる時どんな点に注意していますか。

| | |
|--------------|----|
| 失礼にならないようにする | 12 |
| 言葉づかいに気をつける | 11 |
| 動作をしやすくする | 6 |
| その他 | 4 |
| 無回答 | 14 |

(重複回答あり)

10. 町で『介護をしましょうか』と声をかけられたときどのようにしますか。

| | |
|-----------------|----|
| 快く引き受ける | 11 |
| ことわる | 0 |
| 出来ないことだったら引き受ける | 21 |
| その他 | 2 |
| 無回答 | 7 |

11. 外出をしたときにどんな介護が必要ですか

| | |
|--------------|----|
| 車いすを押す | 13 |
| 階段の上り下り | 24 |
| トイレ | 10 |
| 財布からのお金の出し入れ | 8 |
| 荷物を持つ | 18 |
| バス、汽車の乗り降り | 13 |
| その他 | 1 |
| 無回答 | 9 |

(重複回答あり)

★その他の意見として、坂道で車いすを押すがありました。

アンケート集計結果から

アンケート収集は事務局としては、出来る限り幅広くと考えているわけですが、限界があり一部分の意見として、参考にさせていただければ幸いです。

年代別には30代男性、脳性小児麻痺が多く占めています。そして1級、2級合わせて38名と約90%です。

生活の拠点は自宅および施設が多い。日常生活面での介助は家族、施設職員とならざるを得ない現状である。

介護をされて困るということに自分で出来ることまでされる。とあるがやはり、障害者自身も自分で出来ることは極力自分でするのが原則と思っている人が多いことは大切なことではなかろうか。

介護をしてもらう人についてはボランティアが2人と少ないのは、やはり日常生活は自分で出来る人で、外出時にボランティアが必要ということではなかろうか。

介護されるときの注意事項としては、失礼にならないようにするが12人、言葉づかいに気をつけるが11人等は介護を受けるのが当然と考えていないためである。介護者と関係を大切にしている姿勢が伺える。

町で声をかけられたときの対応については快く引き受けるが11人、出来ないことを引き受けるが21人となっており、いろんな状況があろうが、まず声をかけられたらこちらの意思を相手に伝えコミュニケーションをはかることが大切だと思う。

外出での介護の必要状況はごらんの通りだが、ほんの小さな介護を必要としており、ボランティアの積極的参加が障害を持つ人たちの外出をよりしやすくするのは。

次回も引き続きアンケート結果の報告をさせていただきます。

わたぼうし文芸コーナー

風 邪 障害者支援施設・利用者

風邪 それはどこからくるのだろう
私は特に秋から春にかけて
風邪に悩まされる
風邪を引かぬように注意しているが
時期が来れば必ず風邪で寝込む
どうしてこんな弱い体になったのか
自分でも不思議に思える
風邪を引くと必ず熱が出る
その熱で体がだるくなる
場合によっては体全身の力が抜ける
起き上がることもさへ困難になる
そんなことがあるたびに
「一体どうなるのだろう」と思う
怖い夢を見ている感じがする
「早く熱が下がればよいのに」と
天井を見ながら願うのだけど
一度熱が出るとなかなか下がらない
いくら薬を飲んだって
下がってもまた上がる
そんなことの繰り返し
長いときでは3週間ばかり続く
自分ながら嫌になってしまう
人間である以上は誰でも病気をする
元気なときはバリバリ働こう

ど う し て 障害者支援施設・利用者

夜 どうして
私の陰しか見せてくれないの
これ以上さびしいこと
悲しいことあるわけけないじゃない
もう もうなれっ子じゃない ……あるとすれば
父や母をなくした時
「その日まで何でも笑い飛ばして暮らしてやる」
昼間の私がうそみたいじゃない

=短歌=

ミキの海岸物語 障害者支援施設・利用者

あてと一ぜ 肩を抱かれて歩けない
ちょっと悔しい海岸通り
あなたしか見えない海も
手をつなぐ
いつものパターンいつものペース
つまづいて転びかけるとそのたびに
力が入る君の左手
転ばないときにも
力を入れてくる君の左手
楽しんでおり
奔放よ
歩き方も生き方も
ずっと一緒にあるいてくれる？

自由投稿コーナー

親友・心友・真友 地域住民・団体職員

著名な人が自殺すると必ず週刊誌などで登場する『親友はこう語る』の記事、例えば岡田有希子の時もいろんな親友がマスコミに登場し心を語っていました。しかし彼らは親友であり、心友でなかった。もし彼ら自称他称親友といわれる人々が本当に心からの悩み苦しみをともに分かち合い、励まし助けられる心の友であるなら、そんな友がいたならば、ああはならなかったと思うのです。いえもし心を開くことのできる友であっても、それ以上は出来なかったかもしれません。

私のワープロでは『しんゆう』はもう一つ変換します。親友・心友そして真友です。本当に心を開くことが出来、どんなときにも生きる励ましをしてくれる。こんな友をもてる人はなんと幸いでしょう。これこそ真友といえます。私にはいつも「生きるすばらしさ」を教えてくださいました真友があることに、どんなに感謝してよいのかわかりません。

語り合えると友 地域住民・障害者

学生の頃一緒に楽しみあった友も社会へ出ればつきあいも薄く、それっきりになってしまうことが、多くなってしまいがちです。しかし、厳しい社会でのストレス解消には年に一、二度でもいい、話し合える友人が必要なのではないのでしょうか。仕事はお互い違っていても語り合うことによって、胸の中にあった嫌なことがすーっとなくなり、又、明日からのファイト湧いてくれば、それにこしたことはありません。

心の底から話し合い、アドバイスもしてくれるような親友はなかなかいるものではありませんが、一人でもそんな友がいる人は幸せだと思います。

私も、今一人の親友との仲が末永く続くようによい交際をしていきたいと思っていますし、そして、その友情が一生続いてくれることを願うばかりです。

24時間テレビに思う 障害者支援施設・利用者

毎年8月に行われている日本テレビの24時間テレビ『愛は地球を救う』は、今年の放送で10年目を迎えた。

何故か芸能人を集めて、ただ募金を行っているしか思えてならなかった。あれは一つの手段にすぎないと思う。その理由の一つとして、いくら町でボランティアが、募金を呼びかけたとしても、あんなに多額の募金は集まらないだろう。ところが、若手の人気芸能人を使えばたちまち多額になる。

でも、そこで考えたいのはお金が集まればこの世の中は本当に幸せなのでしょうか？あ

の募金をしてくれる人たちが、募金をしなくても障害者を仲間に入れてくれるだけでも、良いのではないのでしょうか。

募金をしてくれるのは、とてもありがたいのですが、その前にもっと大事なものがあると思います。それは、現代の若者はお金さえ与えておけば、弱い立場の人たちが喜んでくれるように思いがちです。小さな子供の時から養護学校や施設の子供たちと交流させて、「そんななものではなく、相手を理解することが大切なのだ」ということを教育しなければいけないと思います。

それは、現代のいじめの防止策にもなると思います。頭より心の教育が大切なのではないのでしょうか。

萩本欽一さんに、握手をしてもらって募金をしてくれる。でも、その後は知らない顔になります。平日のほんの小さな行動を起こすだけでも社会は変わっていくと思います。

私と生きる展 地域住民・在宅障害者

今回も『生きる展』が昨年の7月8日から6日間画廊プラザ美樹で開かれ、今年は私と山本さんの合同展ということで、私の方は油絵8点山本さんはほのぼのと明るいネコのペン画を20余点を出品されました。

さて、私が絵を描くようになったのは、今は亡き高島さんが描いていたのを思い出し、私も何か描けるのではと、始めたのがきっかけです。

当初筆は無理なので割り箸で点描のように描いていたが、練習をするうちに筆を使うことができ、何とか鑑賞できる絵画を描けるようになり、高島さんの誘いで最初の『生きる展』に出品したことを思い出します。

その様なわけで「生きる展」に当初から出品している私には高島さんを始め数人の死亡した友たちのことがこの会場を訪れると思い出されます。

さて、この「生きる展」は障害の重い人たちの作品や製作を通して様々な思いや希望を現し、生きることの証と尊さをわかってもらい、多くの人たちに障害者を理解していただきたいと願って企画運営されているのです。

「わたぼうし新聞」発刊10号にあたり

わたぼうし連絡会会長

昭和60年1月に創刊号を発刊してから3年、当初は年に3回発刊しようと始まった、この『わたぼうし新聞』活動も順調に進み、早いもので本号で10号を数えることになりました。私はほかの活動が忙しかったため、あまり活動に参加することができませんでしたが、まずは仲間みなさんには「おめでとう」の言葉と協力不足だったことをお詫びする気持ちを贈りたいと思います。3年間ご苦労様でございました。でもこれで終わったわけではないんですね。これからが本番ですけれどね。

思い起こせば、私が「わたぼうし新聞」作りに拘わるようになったのは、昭和58年に七尾市青年団協議会会長をしていた年に、56年の羽咋、57年の松任と続いた「わたぼうしコンサート」を七尾で開催したことがきっかけとなりました。コンサートが終わっても何らかの活動を、そう、コンサートを終えてからこそ、「わたぼうしコンサート」の趣旨を実現化できうるものと信じ、新聞づくりの仲間に加えていただいたのです。

「わたぼうしコンサート」そのものについては、羽咋で開催されたときは都合が悪くてみることはできませんでしたが、松任で開催されたときはみるだけでしたが、一応参加しましたのでどんなコンサートかという大体のことを知っていたつもりです。

しかし、七尾で「わたぼうしコンサート」をしないかと進められたとき、最初は正直言っただけでびっくりしました。私自身、それまで身障者の皆さんとの『ふれあい』というのは、ほとんどありませんでした。ましてや青年団で取り組むということに対しては、当時は全く想像していませんでした。しかし、羽咋や松任ではちゃんと出来ているのに、七尾で出来ないことはおかしいのではないかと考え、青年団の仲間と幾度となく話し合いを重ね、青年団のみで取り組むのではなく、もっともっと多くのみなさんに協力を仰いで開催しようと決まり、マスコミを通じて一般公募に加わってくれた皆さん、身障者の皆さんとともに時には夜遅くまで、金沢や加賀まで出かけたりしました。また、七尾の港祭りの花火大会をみんなで見たり、本当に色々なことをしながらの準備活動でした。

当日もその成果が十二分に活かされ、内容の濃いコンサートになったものと今でも確信しています。お陰で私も、それまでなかなか出来なかった身障者の人たちとのふれあいの日を追って増え、必要以外の気を配っていたのもごく普通にコミュニケーションすることが出来るようになりました。そういった意味で「七尾わたぼうしコンサート」は、すべての面で私を一回りも二回りも大きくしてくれました。本当に何もかもよかったと思っています。

最後になりましたが、私は仕事ながら営業勤務をしていますので、青年団を終えても相変わらず思ったように時間は取れませんが、今後も出来るだけこの新聞づくりに対しては長く参加したいと思っていますので、メンバーの皆さんも読者の皆さんもどうぞよろしくお願いします。

本の紹介

いのちみつめて

北国新聞社刊 定価 ¥900

この本は昭和62年1月3日から7月25日まで、通算108回にわたって「北国新聞」に連載された「いのちみつめて」をまとめたものです。

脳性小児麻痺の子供たちの治療と診断に打ち込んだ石川整肢学園園長故、辻成人さんの肝臓ガンとの闘い、胃ガンで生への執念と肉親への情愛記録した故 堀田静子さんの111日。16才の若さで小児ガンの一種、横紋筋肉腫に倒れた少女の闘病生活を記した故 菊谷美花さん16才レクイエムの3部作で構成されています。

一年遅れのウェディング・ベル

戸沢 ひとみ著

日本テレビ放送網(株)刊 定価 ¥980

「変わらない愛を、ありがとう」 突然の交通事故でした半身の機能が麻痺してしまった。しかし、婚約者の変わらぬ愛に支えられ、絶望の淵から強く明るく車いすで歩き始めた元準ミス・インターナショナルの手記。日本テレビ系『TIME21』でも放映されました。

気分は愛のスピードランナー

鈴木 ひとみ著

日本テレビ放送網(株)刊 定価 ¥980

「一年遅れのウェディング・ベル」の続編。夫の大きな愛に支えられて、ミセスひとみの明るく、爽やかな奮戦記。いま、新しい愛の感動が、人々の心に波紋のように広がっていく。

編集後記

読者の皆さん、あけましておめでとうございます。

昨年は大韓航空機の墜落、INFの撤廃調印、過去最高の円高、ソ連の偵察機による上空侵犯と内外の動きが活発になった年でした。限りなく大きく重大なニュースでしたけれど、あまり驚かなくなっているのは世の中の動きの早さになれたのか、それとも感覚が麻痺しているのか？

「わたぼうし新聞」10号のご愛読ありがとうございました。新聞の形態も落ち着き、新聞を楽しみにしている人もいることは、我々にとって心強い限りです。今年もより充実した内容を目指していきたいと一同燃えていますので、どうぞこれからもよろしく願います。

(H. A)